

山に集まる人々

- 矢筈山早朝登山 -

北九州市立大学文学部人間関係学科

三宅加奈子

要旨

福岡県北九州市門司区には矢筈山という低山がある。そこには1日150人近くもの人が登ってくる。そして、そのほとんどが「早朝登山者」と呼ばれる人々である。「早朝登山者」とは、矢筈山に日常的に登ってきている人々を指す。彼らは矢筈山に登ることを日課としており、その3割ほどの人は雨が降っても風が吹いても休むことがないという。25年間毎日登りつづけている人までいる。本論では、なぜ彼らが山に登るのか、矢筈山がなぜ多くの人を集めるのかについて明らかにする。

まず、早朝登山者達が山頂に着いたときに印をつける登山者名簿から、登山者達は健康への安心感と達成感を矢筈山早朝登山に求めていることが分かった。そして、登山者には「気軽に接しあう関係」が見られる。考察においては、早朝登山を継続することから生まれてくる「山に登る理由」と「気軽に接しあう関係」から矢筈山の魅力について考える。そして、日常的に登ることができる矢筈山だが、日常の生活から切り離された山という非日常的な空間だからこそ成り立つ人間関係があることが明らかとなる。矢筈山早朝登山では日常的に非日常を体験することができるのだ。

目次

はじめに	第3節 高まる達成感
第1章 「早朝登山」とは	第4章 山での人間関係
第1節 矢筈山の概要	第1節 早朝登山者に見られる関係
第2節 早朝登山者	第2節 一般的な登山者に見られる関係
第3節 登山者名簿	第5章 考察
第4節 Tさんの早朝登山	第1節 Tさんにとっての早朝登山
第2章 大衆登山の中の早朝登山	第2節 非日常としての山
第1節 大衆登山の歴史	第6章 結論
第2節 一般的な登山と早朝登山	註
第3章 早朝登山に求められているもの	図・表
第1節 登山者名簿が生み出す意味	参考文献・引用文献一覧
第2節 健康への安心感	

はじめに

私は大学にはいてから山登り（註 1）を始めた。それまで、中学や高校の 1 日旅行での登山くらいしか経験したことがなく、登山に対するイメージは、「きつい」というものでしかなかった。そして、大学に入学してワンダーフォーゲル部に入部し、山登りを何回か経験したあとも、その「きつい」という山のイメージは変わることがなかった。もちろん登山の楽しさも知ったが、やはり山を登って下るのは体力的にも精神的にも大変なのである。けれども、天気の良い週末には山には人があふれる。そして、北海道の山に登るために九州からわざわざ出向く人々がいる。こんなにつらくて面倒なことをたくさんの人が自らやっているのである。「なんでみんな山登りをするんだろう」と自ら山に登りながらも常に疑問に思っていた。

「なぜ山に登るのか」という問いに対しては、「そこに山があるから」という英国の登山家ジョージ・マロリーの言葉が有名であるが（註 2）、私はもっと具体的な答えがほしかった。そんなとき、門司にも夜も明けきらないうちから多くの人々が登ってくる山があることを知り、興味を持ち、ここなら自分の納得いく答えが見つかるかもしれないと思ったのだ。

今回卒論を書くにあたって、その矢筈山で調査を行なった。2001 年 5 月半ばから 12 月始めにかけて、その中の 9 月から 11 月までは矢筈山の麓で、24 年間矢筈山登山を続けているという方のところに同居させてもらいながら山に登り、登山者を観察し、登山者と話をした。

調査対象である矢筈山に集まる登山者は、近所の同じ山にほぼ毎日、日常的に登ってきている。これは、現在一般的な、名のある全国各地の山に登る登山とは異なる。けれども、この矢筈山登山も、「登山」の 1 つであり、旅行的要素を排しているという点では最もシンプルな形の登山であり、

山に登るといふことの本質が見えやすいと言えるだろう。

本論では、矢筈山にたくさんの方が集まる理由を、山頂に置かれた登山者名簿と登山者同士の関係に注目しながら考えていく。「人はなぜ山に登るのか」その理由を 1 つ提示したい。

第 1 章 「早朝登山」とは

第 1 節 矢筈山の概要

矢筈山は福岡県北九州市門司区大里に位置し、標高は 275 メートルで亭山に属する。主な登山道は、一般に使用されている小森江方面からの道と、矢筈山の北に位置する風師山からの縦走路があり、小森江方面からの道は許可車両のみだが車も通れる幅約 4 メートルの砂利道で、登山道から山頂まで 1.1 キロメートル（登山道道しるべより）。麓のバス停である小森江バス停から登山道までは徒歩 20 分、登山口から山頂までは 30 分ほどである。急坂ではないが、1 時間弱のこの登り坂は、真冬でも身体が温まり汗をかく手ごろな散策路である。また、この登山道は「こもれびトンネル」（堤甚五郎 1979）と名がついていることから分かるように、夏でも直射日光のあたらない木漏れ日の中の気持ちよい道である。

山頂に着くと、展望所からは関門海峡を挟んで山口県の彦島や同じ北九州市の若松のほうまで見渡すことができる。この眺めはすばらしく、天気の良い日には海も空も青く輝き、海峡には数多くの船が行き来する。八幡東区の皿倉山、小倉南区の福知山も見渡せ、日没後には、北海道の函館にも劣らないという夜景も楽しめる。

山頂には市のキャンプ場である「矢筈山林間学園」の施設が点在している。（図 1）この林間学園は、昭和 47 年に青少年の育成を目的として、旧陸軍の要塞跡地に建設されたが、そこには当時使用されていた防空壕や石垣が残り、亡くなった兵隊

が奉られた祠もある。その中に炊事塔やキャンプサイトが設けられ、年間を通して利用できる宿泊施設となっている。夏休みには学校や子ども会主催のキャンプで子ども達が多く訪れる。開園以来、矢筈山はずいぶん整備され、一部の人から「必要以上だ。野外活動の妙味が薄らいでしまって、面白くない」(堤：1979)という声があがるほどで、その設備は下界の公園と大差がない。矢筈林間学園の建設と同時に、登山道の整備も進んでいった。

第2節 早朝登山者

この矢筈山には1日平均146人の人が登ってくる(平成12年矢筈山林間学園利用者数報告書より)。このうち、136人が「早朝登山者」、残りの10人は、「一般登山者」と分類されている人々である。1日の登山者のほとんどを占めるこの「早朝登山者」とは、頻りに日常的に矢筈山に登ってきている人のことを指す。そして、「一般登山者」にはそれ以外の人、つまり矢筈山登山を日課としていない人のことだ。本論文の調査対象は「早朝登山者」であり、この論文でもこれらに人々を早朝登山者と呼ぶこととする。

しかし、「早朝登山者」と言っても、彼らが登山をする時間帯は早朝に限ったわけではなく早い人でまだ夜の明けない午前4時頃から登り始め、4時から8時台が最も多く、午後から登ってくる人もいる。林間学園の管理人の方によれば、早朝登ってくる人は全体の6割ほどだそう。麓の町だけでなく、「大里(小森江から門司駅方面に徒歩2.30分の大里バス停方面)からも来る」という。登山者の住んでいる場所やペースにもよるが、家を出発して山に登りかえってくるのは1時間半から2時間ほどの運動となる。

早朝登山者の主な年齢層は50代から70代の中高年である。会社の始まる前や昼休みに登る人もいるが、男性は定年後の人が多く、女性は主婦が

多いようだ。性別比は若干男性が多い。登る形態は、単独、夫婦、友達同士のグループという形が主である。男女共に単独出来ている登山者を多く見るが、その次に2人組の女性を多く見かける。登山者が多いので女性一人でも安心して登れるという話を多く聞いた。運動に適した上下ジャージを着ている人から家からそのまま出てきたようなエプロン姿の人までと、登山者の服装は様々だが、動きやすい普段着が一般的である。登山用ズボンをはいたりストックを持ったりという本格的に登山の服装をした人もちらほら見かけるが、これは一般的な登山として矢筈山に来ている人であろう。

この早朝登山の始まりがいつか定かではない。推測するしかないが、1979年に発行された矢筈山林間学園初代管理人である堤甚五郎さんの本「矢筈の子」には既に早朝登山が登場している。まず、昭和47年、散歩がてらに何回も来園していた人が、イチョウの苗を園にプレゼントしたというエピソードがある。そして、何年の出来事は書かれていないが、山頂の園で飼っていたウサギが逃げ出したことを「健康増進のため、毎日誘い合って、未明のうちから登山する人」が知らせたというエピソードもある(堤：1979)。

そして、昭和47年の矢筈山林間学園が開園する前は登山道が整備されていなかったことと、矢筈山堡壘が大正14年に廃止された後も「一般民間人には、やはり近づきにくい地帯だった」(堤：1979)ことから推測するに、矢筈山に日常的に登る早朝登山は昭和47年頃始まったと考えられる。それは、2002年現在からいうと、33年前であるが、現在はこの当時から早朝登山を続けている人はおらず、24年間続けている人が最も古いそうだ。

第3節 登山者名簿

林間学園の施設である屋根のついた炊事場には、

大きなテーブルといすがいくつも置かれており、登山者の休憩所となっている。そのテーブルの上に2つの名簿が置かれている。ひとつは、日常的な矢筈山登山をしない人、たとえば遠くから来た人や、月に何回も来る意思のない人が名前や住所を書く登山届のようなもの。そして、もう一つは早朝登山者用で、横の行に250人ほどの名前が書かれ、縦の列にその月の日にちが書かれた表にしてあり、名簿に名前のある人は、登ってきたその日の欄に印をつけるようなっている。ひと月に何回も登ってこようという人は、名簿の最後の空欄に名前を書けばよい。月に5回以上印がついていれば、翌月も登ってくる意思があるとみて、管理人が翌月の名簿にも名前を記入してくれる。逆に言えば、ひと月でも5回以上登っていない月があれば名前が消されるので、長年休まず続けている人は名簿の上位に名前が載るようになる。

この2つの名簿はキャンプ場の管理人さんが作っており、早朝登山者用の名簿は11年前からあるそうだ。現在の管理人さんは11年前からの2代目で、初代の管理人さんは夏の利用者が多いときだけしか名簿を作っていなかったが、利用者の人数を市に届けて管理費として予算を下りやすくするために毎月名簿を作っているという。

早朝登山者は山頂に着くと名簿に印をつけ、景色やおしゃべりを楽しみ、そして帰っていくのである。

第4節 Tさんの早朝登山

ここで早朝登山の一例として、筆者が実際に登山をしたときの記録を紹介する。これは、筆者が同居させてもらっていた24年間早朝登山を続けている88歳の女性Tさんと2001年12月7日に登山したときのものだ。

朝食は食べずに、前の晩に玄関に用意しておい

た懐中電灯と猪よけの杖を持ち、朝4時に家を出る。近隣の家屋の間を通り抜けて、登山口へ続くアスファルトの道を出た。あたりはまだ真っ暗で空には星が輝いている。

その坂道をしばらく登ったY字の合流点のところで、中年の男性と出会う。「おはようございます」と挨拶を交わしたあと、「今日は1人ね?」とTさんが声をかけた。この男性はいつも2人で登るが、その相手が今朝は待ち合わせ場所に来ていなかったらしく、「寝坊したんじゃないか」と言っていた。男性は、私たちを追い抜き、先に登っていった。

10分ほど歩くと、車止めのある登山口に着き、ここからは木々に囲まれた砂利道となる。慣れた足取りで隣を歩くTさんから、この登山口のところにシンナーを吸っている人たちがいて声をかけられて怖い思いをしたときの話や、台風が来たときは強風で登るのが大変だったという話を聞きながら登っていく。後ろから、中年の女性が登ってきた。さっきの男性の連れだったらしく、Tさんは「(男性は)先に行ったよー」と言った。彼女も私たちを追い抜き、速いペースで登っていった。

「毎度のことながら、ここまで来ると安心する」、「良かったあ、もう少し」。登山道は矢筈山を巻くようにして作られており、カーブとなっている個所が多く、そこでTさんはこのように一息つく。やはり、24年間ほぼ毎日登って慣れているとはいっても、山登りは緊張と安堵の繰り返しのようだ。30分ほど歩き、山頂が近くなってくると、下ってくる人々とすれ違う。一人で来ている急ぎ足の男性、夫婦、男性2人組と挨拶を交し、「今日は、早いね」、「遅いね」などと一言声を掛け合う。途中で立ち止まって、Tさんが手を合わせた。そこには大きめの石がおいてあるが、そこが山頂にある祠の直下にあたるようで、ここからその祠を拝むそうだ。

家を出てから40分ほどで山頂に到着。登山者名簿に丸をつける。私たちの前に来ていた夫婦は、名

簿に丸をつけた後、休憩もせず、すぐに下っていった。私たちはそこから3メートルほど先の、展望所まで行く。

展望所からの眺めはすばらしかった。まさに「百万ドルの夜景」という感じ。門司港からの始発列車が小森江駅を通過するのが見えた。山頂に着く時間は大体いつも同じなので、この列車を見るのが日課になっているという。Tさんはご主人と自分の故郷に向かって手を合わせた。

今日は私が一緒なので、いつもより長く夜景を眺め、帰路につく。下っていると、女性3人組が上ってきた。「今日は、お連れさん（筆者のこと）がおるんやねー」「そうよー、下関のミスよー」などと冗談を言い合いながらすれ違う。次にであった単独の情勢は、挨拶をしながらTさんの手を握り、私の肩を軽くたたいた。会うと毎回握手をするという。しばらく下って、もうすぐ登山口に戻る頃、「その曲がったところへんで団体さんに会うよ」とTさんが言った。その言葉通り、賑やかな話し声と共に、男女混合の5,6人のグループが登ってきた。毎日、同じ時間、同じペースなので、すれ違う場所も大体決まっているようだ。この人たちとも軽く会話をし、その直後、行きでもすれ違った女性と再度出会う。「2回目ね？」という問いに、「そうよー」と、彼女は元気な足取りで登って行った。Tさんが、小さな声で、「1回じゃ、お腹が空かんのって」と、この女性が山を2往復もする理由を教えてくれた。それから3,4人の登山者とすれ違った。

5時半頃に家に着いたが、日の出まではまだ時間がある。まだ「どこの家の電気もついていない」という。朝食を食べ、睡眠不足だった私は再び布団に入った。

このようにしてTさんの早朝登山は毎日行なわれる。Tさんが登る時間帯はまだ日の出前のため、山頂でゆっくり休憩する人はみられないが、中には山頂で休憩しながら雑談をする登山者の姿が

多くみられる。歩くというより走っているように登ったり、ラジオを流しながら登って他の登山者と関係を持たなかったりする登山者も極たまに見られるが、Tさんの早朝登山は、一般的な登りかたである。

早朝登山とは、矢筈山にその周辺の地域の中高年の人々が日常的に登り、山頂にある登山者名簿に丸をつけ、降りていく行為を言う。

第2章 大衆登山の中の早朝登山

矢筈山の早朝登山は、一般大衆による大衆登山であるが、一般的な登山とは異なる点がある。この章では、大衆登山の歴史について述べ、大衆登山の中で矢筈山早朝登山が占める位置についてみていく。

第1節 大衆登山の歴史

天気の良い週末、人気のある山の山頂にはたくさんの方があふれる。「何らかのかたちで山に登るというひとは数百万人は下らないだろうと見積もられている」（小泉：2001）という。この現在一般的になっている登山は、エレベストのような世界最高峰を目指して登る先鋭的な登山ではなく、明治期まで盛んだった宗教登山でもない。普通の人々がごく普通に山を楽しむために登る（小泉：2001）一般大衆による大衆登山だ。

大衆登山はいつ始まったのだろうか。小泉は、著書「登山の歴史」において以下のようにその歴史を説明する。

わが国の大衆登山の始まりは、第一次大戦前後の大正時代から昭和初期にかけていわゆる大正デモクラシーの時代にさかのぼる。この頃、経済成長を背景にして大学生や社会人の間にスキーや登山が広まり、日本アルプスなどへの登山者は徐々に増加していった。しかし、登山者が増えてきたとい

っても、その層は現在のように厚いものではなく、学校の集団登山や、信仰登山の系譜をひく村方での登山などを除くと、登山はエリートのスポーツであった。そして、この登山ブームは 1935 年ごろがピークで、以降登山人口は次第に減少していく。日中戦争が目の前に迫ってきており、社会的な余裕がなくなりつつあった時代のことであるからやむをえないと言えよう。

1956 年の日本隊によるマナスル登頂がブームの火付け役となり、登山が本格的に復活するのは 1960 年前後からのことだ。これは、戦後起こった 2 回の登山ブームの第 1 波にあたるが、経済の高度成長による金銭的、時間的な余裕があったことがその背景にあったことは言うまでもない。

この戦後最初の登山ブームは 1970 年代まで続くが、その後は陰りを見せ始める。若者の登山離れがおき、登山者が減少したのである。子どものときからテレビゲームに熱中して野外に出ることがほとんどなくなったことや、山や自然に対する好奇心の衰えが、若者の登山離れの原因になったと考えられる。

そして、1990 年代に入って、現在の中高年を中心とする登山ブームが起こる。このブームはバブルがはじけて経済が不調になった頃にはじまっているが、これは、国民の金回りが悪くなってそれまでのように贅沢なレジャーができなくなったことが背景にあると考えられている。金のかからない野外活動が見直され始めたのだ。(小泉:2001)

小泉はこのように、大衆登山に日本の経済が大きく影響していることを述べ、現在の中高年を中心とした登山ブームは経済状態が悪化した結果だと分析している。

この中高年登山ブームについては別の見方もできる。著書『なぜ山に登るのか』において驚は、マナスル登頂の後の登山ブームが起き、そしてそ

の後に、日本経済が異常ともいえる好景気の時代を迎えることとなった。そういう時代には青年はもはや登山の苦勞を厭うようになり、逆に余裕が出てきた中高年の人々が、飽食の結果による体調の異常の解決を意図的に、「みんなで登れば怖くない」という考えによって、大拳山に登るようになった。(驚:1999) このように中高年が山に入る理由を説明する。

筆者自身は、中高年登山者の増加には、金銭的な余裕のなさではなく、健康意識の高まりのほうが深くかかわりがあると考え。金銭的な余裕がなくなり、お金のかかるレジャーができなくなったことで、家族旅行が遊園地からオートキャンプへ、ボーリングが潮干狩りに変わるかもしれないが、もう身体的には若くない中高年が山に登るには、レジャーにお金をかけられなくなったことだけでは動機として弱い。今の日本は不景気だと言っても、食べるものに不自由することはなく、時間に追われているためにどこへ行くにも自動車を使う。このような生活が太りすぎや運動不足を招き、身体が不調を訴えることとなる。そこで生まれた健康への関心が、中高年を山へ向かわせる大きな要因となっている、これは間違いなくいえることである。

また、日本人の自然観の変化も、大衆登山の歴史に大きく関わっている。小泉によると、大衆登山の始まった当時は、学校教育の効果で、日本人の自然を見る目が西洋風に変化してきた時期にあたっていたという。西洋風の見方というのはどういうものかはっきり説明されていないが、この変化によって、「人々の興味関心がそれまでの名所旧跡や神社仏閣から、優れた自然景観だ度を含むものに変化し、それに伴って自然を訪れる旅行者が増加し始めた。尾瀬ヶ原や鳥取砂丘などはそれまで不毛の土地としかみられてなかったが、この頃からようやくすばらしいものであると見られるようになった」(小泉:2001)という。西洋的な自然観が日

本人に備わることによって、今まで目に止まらなかった自然のあり方も、「美しい」と感じられるようになったそうだ。

明治時代に、西洋的な自然観を日本に紹介したとされる本がある。明治 27 年に発売された『日本風景論』だ。著者は地理学者の志賀重昂だが、この本は、「日本の近代登山の扉をたたかした名著」(安川:2000)という。日本の風景 - ことに山と溪谷についての自然美、登山コース、登山技術の三点に触れて、(安川:2000)おり、登山効果を大いに鼓吹して登山熱をあおった(小泉:2001)。そして、日本で始めて、それまでの浮世絵ないしは山水画的な自然を、西欧風な美観によってとらえた(安川:2000)という。当時は山の本として受け入れられたこの本も、現代風に見るならば“山の本”というよりも“自然の本”であり、日本の風景を通して山の魅力を説いた本とみてよいだろう(安川:2000)。山そのものを楽しむ近代登山の紹介を通して、初めて西洋の自然観が日本に伝えられたことからして、近代登山と日本人の自然観の変化は切っても切れない関係にあったようだ。

そしてもう一つ、一般大衆に大きな影響を与えたのが、登山の効用とされるものの変化だろう。これについては、大衆登山の始まりと時を同じくして発足した国立公園法の変遷に関係が深い。

国立公園法は、1931年(昭和6年)に成立し、同年10月1日より施行された。これはアメリカのナショナルパークにならい、国民健康の強化、外国からの観光客誘致による外貨獲得、そして開発からの自然保護などを目的に、日本にも国立公園を設置しようという趣旨に基づくものだった。そして、心身の鍛練の場として国立公園は活用されたという(藤野:2000)。

「戦前では富国強兵の政策にのっとり、ラジオ体操をはじめ全てのスポーツが、丈夫で長持ちする兵隊になるために奨励されたらしく、その限りで

はハイキングも盛んに行なわれた」(藤田:1997)。国立公園に定められた山も例外ではなく、経験豊富な登山家のためではなく、一般国民の心身鍛練の場として、国立公園の大自然を活用しようという発想で、様々なハイキングコースが整備されていた。立山においては、1938年以降「従来の遊び半分から一転、鍛練登山」を行なう登山者たちによって登山者が激増した。山岳信仰の対象であった立山は、心身鍛練の場としても理解されたという(藤野:2000)。戦局の悪化によって登山をする余裕などなくなり、国立公園そのものの存在も危ぶまれたが、このような国の政策によって、登山の大衆化が進んだことは間違いない。

そして、昭和 60 年ごろから中高年登山者が増えてきた背景にも、環境庁が公害日本の裏返しで「名水」を選び、「森林浴」が奨励され、「地球にやさしい」エコロジーという言葉が一般化したという背景があるようだ。働きすぎや労働短縮が大きな社会問題となる一方、健康問題や自然に対する関心が高まった頃とも、中高年登山者増加の時期は一致している(藤田:1997)。

以上、登山が大衆化する歴史を見てきたが、その流れに大きな影響を与えてきたのは、「経済状態」、「自然観の変化」、「国の政策」であり、大衆登山の変遷は社会生活と密接に関わっていると言える。

第2節 一般的な登山と早朝登山

前節で述べたようにして登山は一般大衆に広がり、その大衆登山の形の1つとして早朝登山がある。しかし、早朝登山は一般的な登山と、登山が日常化しているという点で大きく異なる。

一般登山では、富士山や北アルプスの山々といった有名な、標高も 1000メートルから 3000メートルの高い山に上ることが多い。しかし、標高の高い山に登るということが一般的な登山というわけではない。早朝登山の行われている矢筈山のよ

うな街中にある標高の低い山も、「地域の山」とか「近郊の山」と呼ばれ、ガイドブックにも掲載されており、遠方から一般的な登山として登りに来る人々がいる。また、矢筈山の近所に住んでいても、矢筈山登山を日課にしていない人が登れば、それは一般的な登山とすることができる。つまり、一般的な登山とは、日常化していない登山のことを指す。そこには自然に、旅行的要素が含まれる。

これに対して、毎日の日課となる早朝登山は生活の一部である。登山者も山の近所の人に限られるので旅行的要素も少ない。登山が日常となっているのである。

第3章 早朝登山に求められているもの

早朝登山者たちに山に登る理由を尋ねると、ほぼ全員から「健康のため」という答えが返ってくる。しかし、健康のための運動なら他のスポーツやウォーキングでもできる。この章では、山頂に置かれた登山者名簿を入り口として、早朝登山の魅力を考察する。

第1節 登山者名簿が生み出す意味

この節では、登山者名簿をめぐる事例を挙げ、その意味について考える。

記録としての印

山頂に着いて登山者名簿に印をつけるとき、「2日も来てなかったんやねー」という中年の女性がいた。毎日来るのではなく週に何回かしか来ない登山者にとって、記録がないと自分がいつ登ってきたかはっきりしないようだ。また、二人連れの女性が名簿を見て「サチコサン、どっか悪いんやろーねー。ずーっと来てない」と心配そうに語った。これは、名簿の知り合いの欄に印がついてないことを見て言ったことと思われる。名簿につけた印は一種の記録であり、自分や他人の登山の状況を知ることができる。

他人への信号

登山者名簿の中に、自分の日にちの欄に「休」や「×」とかいて前もって来られない日にちを書いている人がある。これは名簿を見る他者へのメッセージだと考えることができる。「森林浴を楽しもう！木々の香りを全身で感じていると心も体もリフレッシュしてきます・自分にあった無理のない山登りに挑戦することが若さを保つ秘訣の1つです」といった、登山道に設置された看板文面からも分かるように、山に登ることは健康に良いとされている。そこから考えると、山に来ないことは自分の健康維持に努力していないことになるが、これに沿うように、「山をさぼる」という言葉の裏には「山に毎日登るべきだ、そして山を休むのは良くないことだ」という意識が読み取れる。前もって来られない日にちを登山者名簿に書いているのは、自分はさぼっているのではなく来ることができないということを名簿を見る他人に知らせていると考えられる。こういった人には、山を休むことはよくないことだという考えが働いているのだろう。

楽しみとしての印

10月最後の日、午前11時ごろ山頂に着いてみると、名簿がすでに次の月のものになってしまった。せっかく登ってきたのに10月31日の欄に印がつけられないのだ。なんだかすっきりしない気持ちを味わい、後から来る登山者の様子を観察してみた。山頂に着いた登山者たちは、印をつけようとして名簿を開く。そして、今日の欄には印がつけられないことに気づき、みな一様に残念がった。印をどうしてもつけたいらしく、「まあ、いいや。」と言って11月1日の欄に印をつける人もいた。

印をつけるという行為は、登山者たちにとって大きな楽しみとなっているようだ。そして、登った結果の記録として印をつけることが、彼らにとって単なる楽しみではなく、登る目的とまでなっ

ているのではないかと考えられる出来事もあった。山頂に着いて眺めの良いところまで行かず、名簿に印をつけるだけでさっさと帰ってしまう登山者がいる。そして、そういう登山者に対して「丸付ければ用はないけーね」と声をかける人がいたのだ。また、登って来ていない日でも、後から印をつけたり、来ていない人の印をつけたりという印のつけあいもしているようだ。これは完全に目的と行為が逆転してしまっているといえる。

第2節 健康への安心感

第1節では、登山者名簿に印をつけることが早朝登山者にとって楽しみとなっており、さらには登山の目的とまでなっている場合があることを述べた。なぜ、名簿に印をつけるという行為がここまで人を惹きつけるのだろうか。

登山者名簿に印をつけるという行為は、健康のために何かをしてという安心感をより高める効果があるのではないかと筆者は考える。自分の健康は、特に高齢者にとって大きな関心事である。「健康とは、何かやりたいことのために、あるいは充実した時を送るために必要なものの一つだ。いや、たとえ病んでいても充実した人生もあるのだが、健康そのものが目的化、目標化してしまう」(飯島：2001)。このような、現代の健康ブーム、ウォーキングブームの中、健康のために何かしなければという強迫観念のようなものもあるだろう。「日本人の多くは、『ウォーキングがいい』と聞くと、雨の日も、風の日も、雪の日も歩こうと努力する。歩かなければいけない、と深刻に考えるのですね。これでは長く続きません」(飯島：2001)。矢筈山でも同じような話を聞いた。登山者名簿の、「(前から)3ページ目までの人(75人くらい)は、雨が降っても風が吹いても来る」というのだ。前述したように、長く続けている人ほど名簿の前半に名前が載っているのだから、3ページ目までの人という

長年早朝登山を続けている人ということになる。実際に、2001年12月の名簿を見てみると、1枚に26人の名前が記入してあるが、毎日印がついている人の数は、1枚目18人、2枚目13人、3枚目13人、4枚目9人、5枚目4人、6枚目7人、7枚目6人、8枚目7人、9枚目5人、10枚目7人、そして11枚目は16人中1人であった。また、平成12年度の登山者名簿の統計を見ても、雨の日には登山者は通常の半分ほどに減る者の、晴れと曇りに日では差は見られない。天気が悪いと、登山の大きな楽しみである頂上からの展望がきかないため、一般的な登山者にとって天候が悪いと眺望も楽しむことはできないが、早朝登山者にとっては大きな関心事ではないようだ。運動のために登山をする者にとって景色は二の次なのだろう。実際、早朝登山者たちに話を聞いても、ほぼ全員から「健康とボケ防止のため」だとか「運動になるから」といった健康維持を早朝登山の目的としていることが理由として出てくる。医者に運動するように勧められたとか、健康診断の結果が悪かったからなどと答える人も多い。

しかし、運動したからといってすぐにその効果は実感できるものではない。運動を続けていくうちに、気がついたら体が軽くなっていったとか、風邪を引きにくくなっていったとかいう変化が緩やかでわかりにくいものである。そんな中、運動を続けていく上で重要な要素となってくるのは自分が健康のために何かをした実感だ。登山という行為は、この点において他の健康を目的としたウォーキングやジョギングといったほかの運動より優れている。「山に登る」という行為は始めと終わりがはっきりしているために認識しやすく、「山に登った」という行為を言葉で表しやすいために、自分のしたことの実感が得られやすいからだ。そして、名簿に印をつけることで毎日続けている行為が視覚化し、その安定感をより確かなものとしてくれ

る。ここに、登山者名簿の魅力があるといえ、早朝登山者にとって大きな楽しみとなる要因があるといえる。

第3節 高まる達成感

名簿に印を多くつけること、欄を丸印で埋めることが、山に登る目的となってしまう。この原因を考えていく上で、重要なヒントとなりえるのが、一般的な登山者の間で起こっている日本百名山ブームである。

百名山ブームは、1964年に発行された深田久弥著『日本百名山』に紹介された日本の百名山を登ろうという、中高年が中心となっている動きであるが、百名山が話題に上るようになったのは、ここ10年ほどのことである(小泉：2001)という。この背景には、テレビ番組による百名山の紹介があったようだ(藤田：1997)。そして、このブームは「百名山」に選ばれた山が、今まで見向きもされていなかった山であっても、登山者が急増するといった現象が起こるほどの大きな流れになった。ブームに乗って、日本300名山や、九州100名山といった本まで刊行され、百名山を「卒業」したひとは、200名山、300名山、と続けていくという。

「なぜ急に百名山がブームになったのかよくわからない点が多いが、よく言われるように、それまで会社や競争社会で働いてきた山好きサラリーマンが、退職したとたん目標を失い、それに代わるものとして百名山の登頂に熱中するようになったというのが、おそらく正しいのであろう。百名山を目指しているほとんどが男性であることがその裏づけになっているように思われる」(小泉：2001)。

もともと登山は、頂上に立ったときの達成感がその主な魅力とされているが、その山を「百名山」という枠でくくったことで、ひとつひとつ山をこなすという、もう一つの達成感を得られるように

なった。退職などで目標を失った者にとって自分が何かしたいという達成感は生きていく上で重要なものだ。

矢筈山早朝登山においても同じ状況がある。「することがないからみんな来る」「ここらへんは夫をなくして1人暮らしのばあさんが多い。だからみんな来る。」筆者が矢筈山に登山者が多い理由に登山者に尋ねたときの答えである。こういった人々にとって登った日の欄を全て印で埋めることは、それ自体が目標となりえるのではないだろうか。ただ漠然と毎日山に登ると、表を印で埋めていくには達成感にかなりの差がある。

早朝登山でいう印をつけること、百名山でいうひとつひとつの山をこなしていくことに重きをおきすぎたのが、登ってもいない日に丸をつけるという行為や、百名山の数にとらわれてしまっているという現象に表れている。「中には山仲間との競争心に駆られて、ただもう、がむしゃらに短期間に10も20も登頂数を稼ぐ人もいる。登った百名山を勲章のように誇らしげに胸に張るのはどんなものだろう。だいたい月に10も20も山を転々と旅行しつつ、やみくもに登り歩いて何が楽しいか。それこそ味わいのない山歩きと愚えてならない」(藤田：1997)。百名山ブームに対しては様々な意見があるが、そのほとんどがこのような数字にとらわれすぎていることへの批判である。

登山者名簿の印や百名山の数にとらわれている人々は、ただ普通に山に登るだけでは満足しない。早朝登山において、もともとの登山の魅力である健康に良い点や、山頂に着いたときに得られる達成感が登山者名簿で高められている。そしてそれは、現在の健康ブームと一般的な登山界でも目立ってきている達成感を求める傾向と一致し、多くの登山者を集める。そして、早朝登山者の数は、年々増加している(表1)。

第4章 気軽に接しあう関係

矢筈山早朝登山者たちは登山会などの意図的に集められた集団ではない。自然発生的に集まってきている人々である。しかし、彼らは非常に仲が良いように見える。この章では、矢筈山早朝登山と一般的な登山に見られる登山者同志の気軽に接しあう関係について述べていく。

第1節 早朝登山者に見られる関係

早朝登山者たちは気軽に接しあう関係が見られる。まず、登山者どうし会った時、必ず挨拶が交わされる。そして、山頂の休憩所では景色を見ながら登山者同士の間話をする姿が見られる。山頂で一緒になった人と誘い合っただけで一緒に山を下ることもある。

挨拶

「おはようございます」、「こんにちは」、「おつかれさま」、「行ってらっしゃい」、「お先に」。これらが彼らの間で交わされる挨拶である。挨拶が交わされるのは登山道で登ってきた登山者と下ってきた登山者がすれ違った時や、足の早い人が前を行く人を追い抜かすときである。山頂の休憩所から席を立つときにも一言声をかけて帰っていく。

このような挨拶は、一般的な登山者たちにも同じように見られる行動である。その反面、現代での日常生活では、初対面の人と挨拶を交わすことはほとんどなく、普段の生活のなかですれ違いざまに初対面の人に挨拶をしても怪訝な顔で見られるだけだ。

山と日常生活とは挨拶をする程度にかなりの差があるが、山での挨拶はどのようなところから生まれてくるのだろうか。考えられる理由としては、まず、生命の危険のある山の中では自分は安全な人間だという証明としての挨拶。そして、山登りという同じ行為をすることから生まれる仲間意識からの挨拶である。これについては、仲間意識が

先にあるのか、相手との距離を縮めるために挨拶が行われた結果仲間意識が生まれたのかどちらが先かははっきり言えないが、両方の作用であるのではないだろうか。初めて山に登る人は他人からの挨拶に驚くだろうが、自分以外が皆挨拶をする世界では、すぐにそれに順応することになる。

世間話

山頂に着き、登山者名簿の置いてある炊事場から少し登ると関門海峡をはさんで彦島や若松のほうまで見渡せる展望のよい休憩所に出る。ほとんどの登山者はここで一服してから山を下る。そして、ここでは様々な世間話が交わされる。まず、その日の天気の話から始まり、時事問題、自分の息子や娘の話へ続く。早朝登山者は登って来る時間帯がだいたい決まっているので、おなじ時間帯の人は顔見知りになりやすく、そのため会話が弾むのだろう。また、必ず挨拶を交わす者同士は親近感がわきやすいことがある。実際に登山者に尋ねてみても、挨拶から始めの一言が始まるという。これは著者の経験言えることでもあるが、初対面でも会話を交わすことが当たり前となっている。休憩所について先に座って人と挨拶を交わすと、そこから何かを話さなければ気まずいと感じるために始まる会話もあるかもしれない。

気軽に接しあう関係

山頂で世間話をした後、「一緒に下りませんか」と誘われ、一緒に山を下ることがあった。山に登る時同じタイミングになって、会話を楽しみながら山頂まで一緒にのぼったこともあった。登山者を観察してみても、登りは1人だった登山者が下りは数人のグループで下ってくる姿が多く確認できた。また、私が居候させてもらった方は、初対面の人と一緒に山を下った後、自分の家に招いていた。

あまりに仲がいいように見えるので、みんな同じ町内のご近所なのかと思うほどである。しかし、とても仲の良いように見えるもの同士でも、実際は名前も知らなかったりする。もちろん例外はあるが、山を降りた後のそこまでの深い交流はないのだろう。ここから考えるに、登山者同士は「仲がいい」のではなく、他者に対する警戒心がなく「気軽に接しあう関係」が見られるといえる。

第2節 一般的な登山者に見られる関係

そして、こういった気軽に接しあう関係は、一般的な登山でも見られる。登山という共通の趣味を持つ同士の共通の話題があることから、早朝登山者たちと同じように初対面の者同士の会話も盛んで、気が合った人と山での行動をともにすることもある。この仲間意識から来る警戒心のなさを利用したと思われる犯罪も起こっており、以下に最近起こった二つの事件を新聞記事から紹介する。

「滋賀県志賀町の比良山系の登山道で、先月から今月にかけて、見知らぬ男から勧められた缶入り飲料を飲んだ登山者が意識が朦朧となる被害が4件相次ぎ、県警捜査1課と堅田署は22日、向精神薬を混入した缶コーヒーを登山者に渡したとして、京都府宇治市小倉町西山、マッサージ師、N容疑者(51)を麻薬及び向精神薬取締法違反容疑で逮捕。自宅から向精神薬の錠剤290錠を押収した。

調べでは、N容疑者は6月4日午後4時ごろ、志賀町木戸の大川砂防ダム付近で、大阪市大正区の自営業の男性(45)と妻(46)に向精神薬を混入させた缶コーヒーを2本渡した疑い。夫婦は下山後、JR志賀駅で飲んだところ、電車の中で意識が朦朧となったため、同署に届けた。(中略)

また、今月16日午後4時ごろ、同町北比良の「比良ロープウェイ」近くの登山道で、大阪府内の団体職員の男性(46)と会社員の女性(36)が下山中、

見知らぬ男から「山を下りるのに缶コーヒーが重い。飲んでくれませんか」と差し出されて飲んだところ、意識が遠のき、男性は登山道の滝つぼ、女性はその付近に転落。よく17日に意識が戻り、ともに自力で近くの山小屋に辿り着き、軽い怪我を負って入院していることも判明した。

目撃証言と手口が類似していることなどから、同署はいずれもN容疑者が関与しているとみて、追求している。N容疑者は独身。頻繁に比良山系に来ており、登山は上級者だった。

今月16日に被害にあった男性は「1ヶ月以上も前から被害が出ていたのなら、警察は登山道に看板を立てるなど、注意を呼びかけるべきではなかったか。山では物を融通しあうので、登山者は相手を信用して飲んでしまう」と話している。

被害者は4件とも男女2人連れ立った。残る2件は6月中旬に発生しているが、吐き気程度の被害らしい(毎日新聞 2000年7月22日)。

「宮崎県小林市の森林管理所の男性職員(49)が昨秋、登山者風の男から寸借詐欺の被害にあったとして小林署に被害届けを出そうとしたところ、同署は「事件にならない」「だまされた方も悪い」などと今月5月まで受理しなかったことが4日わかった。(中略)

男性は昨年10月24日、家族と韓国岳(宮崎県及びの市)に登り車で帰宅途中、登山姿で小林市内の県道を歩いている男に声をかけた。男は長野県白馬村に住むプロガイドと名乗り「下山中に財布を無くした」と話したため宮崎港まで送り、善意で大阪までのフェリー代3万円を貸した。別れ際に「金を返す」と約束したが、1週間を過ぎても連絡はなく調べたところ、男が話した住所、氏名は実在しなかった。

男性は11月、小林署を訪れたが「同情心で貸したのだから詐欺事件にはならない」「だまされた方

も悪い」などとして受理されなかった。男性は知人の登山愛好者から同様の事件が全国各地で起きていることを知り、弁護士に相談するなどして今年5月、4回目の訪問でようやく被害届が受理された(以下略)。(毎日新聞2000年11月14日)。

まず、滋賀県で起きた向精神薬入りのジュースの事件だが、この記事では「山では物を融通しあうので、登山者は信用して飲んでしまう」と被害者は語っている。この山では食べ物を融通しあうという背景に、食料が手に入りにくいという山の特殊性もあるが、食料を分け合うのは、まずその相手に行為があつてのことだ。その好意が登山者同士の仲間意識から生まれると考えられる。次に、宮崎の詐欺事件は、犯人の男と被害者が山を趣味とする者同士でなければ起こらなかったと考えられる事件である。

このように、犯罪に利用されてしまうくらい、登山者同士の仲間意識は強い者だ。このような犯罪が多発すれば、厳しい自然条件のなか、様々な危険に囲まれた山で、人まで信用できなくなってしまうだろう。

以上、見てきたように、矢筈山で見られる登山者たちの挨拶や世間話、そして気軽に接しあう関係は、同じように一般的な登山でも見ることができる特徴である。しかし、それは宮崎の詐欺事件で被害者が相手を信用しすぎた、といわれていることから分かるように、下界では通用しないのだ。

矢筈山での人間関係は、下界まで、つまり日常までもって帰ろうとすればもって帰ることができる。矢筈山は「地域の山」であり、全国から人が集まる一般的な山とは違い、登山者の集まる範囲が狭いからだ。けれども前述したように、その様子はない。山での仲間意識から生まれた人間関係は山だけの限られた世界にのみ存在するようだ。

第5章 考察

第3章において早朝登山に人々が求めているのは健康への安心感や達成感であることを述べた。また、第4章では、矢筈山では気軽に接しあう登山者の関係があることを述べた。この章では25年間早朝登山を続けているTさんにとっての早朝登山の意味を考えていながら、登山が日常化することで生まれる「登る理由」と矢筈山での人間関係から早朝登山が日常の中の非日常であることを指摘する。

第1節 Tさんにとっての早朝登山

Tさんは、早朝登山を25年間ほぼ毎日続けている。2002年現在には89歳になるので、64歳の時に早朝登山を始めたことになるが、この始めるきっかけにはあまり記憶は残っていないようだ。矢筈山のふもとにある小森江貯水池に周りを近所の人と散歩していたが、いつしか1人で矢筈山に登るようになったのが最初だという。同時期に「あるこう会」(註3)にも入会し、その会主催のつき1回の登山や長距離歩行にも参加するようになった。もともと体を動かすのが好きで、矢筈山にも昔は薪を取りに登っていたそうなので、登るようになったのは自然なことだったのだろう。20年間早朝登山を続けている人によると、20年前は、早朝登山をしている人は10人が20人しかいなかったという。だから、24年前の当時は早朝登山者はほとんどいなかったと考えられる。

現在Tさんは「歩こう会」にはほとんど参加していない。「歩こう会」で行われる登山は、矢筈山よりも高い山に登ることが多く、体力の衰えとともに、負担が増したからだと考えられる。「歩こう会」には通算126回参加したといい、「150(回)までやれたけど、迷惑かける前にやめた」そうだ。しかし、体力が衰えたといっても、現在のTさんは、とても88歳とは思えないほど、足取りも軽く、頭

もはっきりしており、とても若々しい印象を受ける。Tさんはその若さの理由を「早朝登山のおかげ」だとは言わないが、体を動かすことが大事だとは考えているようだ。

Tさんは、午前3時50分に起床し、4時に矢筈山に出発する。そして5時10分か15分には帰宅し、朝食を取り、それからしばらくはテレビを見たりラジオを聞いて過ごす。日中は、掃除をしたり、好きな縫い物をしたり、庭仕事をしたり。遊びに来た近所の人とコーヒーを飲みながらおしゃべりを楽しむのもほぼ毎日のことだ。日によっては、老人会主催のグランドゴルフや食事会にも出かけていく。とにかく、なにもしないでじっとしていることはなく、いつも動いている。同世代の近所の人にはヘルパーを頼んでいる人もいるが、「全部自分でできんとつまらん」という。18時には入浴と晩御飯を済ませ、20時半には就寝する。

なぜ、まだ日もあけない午前4時からTさんは登山をするのだろうか。Tさんと同じように4時代に登って来るほかの登山者に聞くと、この人は50代の女性だが、旦那さんの出勤時間の関係で、この時間が山に登って、帰ってきて、シャワーを浴び、一息ついてから朝食の準備をするのに丁度良いのだといていた。このような人や、早起きの高齢者にとっては起きてすぐの朝食の前の運動に都合の良い時間なのだろう。Tさんの場合は、始めは「こんな時間には、登っていなかった」という。4時から上り始めたのは、4,5年程前からで、その前は6時頃だったそうだ。一日中体を動かしてもあまり眠れず、午前1時には目が覚めてしまうという話も聞くので4時という時間はTさんにとって丁度良い時間だと考えられる。Tさん自身はその理由を、「早く済んでほかのことができる」からだとして説明する。毎日用事がたくさんあるので、山に行くのを早く済ませたいそうだ。この言葉から、長年習慣となった早朝登山が、「毎日しなけれ

ばならないこと」となっていることがわかる。このような意識が感じることができるTさんの言動はほかにもある。「今回は縁がなかった」という言葉である。また、次のような出来事もあった。朝4時ごろは強い雨が降っており、いつもの時間には矢筈山にはいけなかったが、9時ごろになって天気回復してきた。午後から用事があることもあって、Tさんは山に行こうかどうしようか迷っているようであった。「今日ぐらいは行かんでいい。丸も誰かが付けてくれる」といって出かけていったのだ。

また、早朝登山を続けることは、Tさんの誇りともなっているようだ。Tさんの山での友達で、「20年以上山登りをしているのだから、市に連絡して表彰してもらおう」という人がいるそうだが、「別にえらいことをしているのではないから、やめて」といっている、という話を何回かしていた。しかし、こういった話を筆者に聞かせてくれることからしても、心の底から嫌だとは感じていないと思われる。毎朝かかさず山登りをしているという話は、Tさんが初対面の人に対してよく出す話題でもある。他の早朝登山者から、「早朝登山は、健康のバロメーター」であるという話を聞いた。その日の登山の調子によって、自分の体調がわかるのだという。Tさんにとっても同じことが言え、早朝登山を続けることが自分が健康であることの証になっており、それが自信へとつながっているのだろう。早朝登山をしていない人に対する「あの人は山も登らん」という言葉や、足腰が弱く、自動車を使って山頂まで行く人に対して、「私は自分の足が動かんことになったら、行かんでええ」という言葉が、健康を保ち、早朝登山を続けることへのこだわりの表れとなっている。

もうひとつTさんの口から出る言葉に、「(山に)行かんと、みんなが心配する」というものがある。いつもと同じ時間に登山しているためか、その時

間に遅れたり、休んだりすると、同じ時間帯の人から「何かあったのか」と心配されるから山に行かなければならないというのだ。事実、Tさんが早朝登山を休んだ日には、同じ時間帯の人から「今日はTさんが来ていない」という話が出ていた。Tさん15年前に夫を亡くし、現在1人暮らしであるため、その点もみんなが気にかける理由であろう。Tさんは、「山の友達さええ」という。どこにいても声をかけてくれ、みんなやさしいという。山を下りた後の交流はあまりないようだが、懐中電灯入れを縫ってプレゼントしたり、登山道であつたら一緒に登ったり下ったりすることもよくある。毎日一緒に上る特定の仲間はいなくとも、他の登山者との頻繁な関わりが、大きな励みとなっているようである。

Tさんにとって、早朝登山は、「何のために登るのか」以前に、毎日の習慣となり、日課となっている。しかし、その背景には強い健康への執着があることは間違いない。そして、山での人間関係が継続の励みとなっている。

Tさんにとっての早朝登山とはなになのだろうか。Tさんは、早朝登山について、「やっぱり楽しみ。みな(皆)ものを言うてくれる」述べる。また、冬の早朝寒いなか、外に出て行くのはつらくないかとの質問に、「行きたくないと思うことはない、苦にならん」という。三が日はみんな休んでいたが、お正月も登山を休むことはなく、「私に山の休みはない」そうだ。そして、Tさんの口からは次のような言葉も出てくる。「(矢筈山に)いつまで登れるかと思うが、あと一年ぐらいはがんばる」。Tさんの生活の中で、早朝登山は欠かすことのできないほど大きな位置をしめているようだ。

Tさんも他の登山者と同じように早朝登山の理由を「健康のために登る」のだと言う。しかし、Tさんと同じように毎日やすまない人や、長年続けている人からは「健康のための運動」以上に早朝登

山がなっていることが感じられる。「どのくらいの頻度で矢筈山に来ているか」の質問に、自信を持って「毎日来ている」と答える毎朝4時から20年間早朝登山を続けている50代の女性は、「寒い日もはずかしゅうないように(休まない)」という。そして、毎日ではないが、週2,3回を12年続けている70代の女性からは次のような言葉を聞いた。「『名簿に印を付けんと1日が済まん』ってみんな言うけど、私は自分が懸けとる(自分に懸けて登っているから)から関係ない」。これは、早朝登山を継続することによって、生まれてくる気持ちである。

第2節 非日常としての山

第1節では矢筈山早朝登山が、一般的な登山と異なり、日常であること、つまり、毎日登ることができるという点から生まれる理由について述べた。本節では矢筈山での山だけに限られた人間関係から、早朝登山には日常体験できる非日常であることを指摘する。第4章で述べた山での気軽に接しあう関係は、矢筈山での次のような事例から、山という環境の非日常性がそれを引き起こしているのではないかと筆者は考える。

Tさんは、山友達のおじいさんと山であった時、ちゃん付けで名前を呼び合うことを例にして、「山ではみんな子ども」だと言っていた。矢筈山早朝登山者を見ていてこのような言葉が出てきたわけに気がついた。それは、矢筈山では男女の距離が近いということである。男女2人、女性3人の5人グループできている人もいるし、夫婦ではない中年の2人の男女が朝から待ち合わせて山に登ることもある。このような姿は山以外では不自然に見えるだろう。山の中という特殊な環境の中で、非日常の世界だからこそ可能なのではないか。こう考えると、必ずされる挨拶や、初対面の者同士の会話なども、非日常だからこそ生まれてくると説明がつく。そして、山を下りた日常の世界までこ

の関係を持ち込まないことで非日常性が保たれる。

矢筈山の中は、ある意味異世界と言えるだろう。全ての人々が挨拶を交わし、初対面の者同士が言葉を交わす。筆者自身、初対面の登山者にキャンプ場を案内してもらったり、一時間以上話をしたこともあった。そういったことが不自然ではない世界なのである。始めてきた人は違和感を覚えるだろうが、慣れてしまえば、自分から知らない人に声をかけることが普通になってくる。しかし、他の登山者に対して笑顔で挨拶したり、愛想がよくなったとしてもそれを普段の生活まで続ける必要はない。早朝登山での人間関係は矢筈山だけに限られているからだ。このような気軽に言葉を交わすことのできる雰囲気の魅力を感じて来ている人も多いだろう。特に、早朝登山者に多いとされる、定年後のおじさん、夫に先立たれた一人暮らしのおばあさんにとって人と接する機会は貴重なのではないだろうか。また、矢筈山での人間関係は老人会のようにその地域に密着したものではなく、課せられた役割もない。よって、トラブルも起こりにくく組織のしがらみもない。こういった居心地のよい人間関係が矢筈山早朝登山の魅力となっている。

終章 結論

矢筈山早朝登山者から「なぜ山に登るのか」という問いに対して「健康のため」という答えが返ってくる。確かに、始めのきっかけは高血圧だとか腰痛だとか太りすぎと言った問題を解決したいという気持ちであろう。しかし、矢筈山がいくら「毎日登るのに手ごろな山」であっても、登って汗をかくことには変わらないし、寒さの厳しい冬場にはさらにつらさを味わうことになる。しかも、からだの変化は運動を始めてすぐ得られる者ではなく実感しにくい。しかし、第3章で述べたように、登山者名簿が継続の大きな要因となっており、登っ

てきた日に名簿に印で埋めること自体が目標ともなりえる。そして、第4章で述べたように、山における仲間意識や非日常性によって生まれる他者との交流が早朝登山の魅力の一つになっていることは間違いない。毎日絶対に休まず登っている人や10年、20年と長年続けている人からは、第5章で述べたように「何かに負けたくない」という困難に立ち向かう気持ちを感じられた。始めは健康維持として始めた早朝登山が、毎日の習慣となり、「休むべきではない」自分との闘いに変化していく。そして、矢筈山には日常的にのぼることから生まれるような「登る理由」と、山という日常から切り離された非日常であることから生まれる人間関係がある。

しかし、実際には登山者たちに「なぜ毎日休まず登るのか」「なぜこんなに長く続けているのか」と尋ねても、すぐに答えが返ってこない。そして、少し間があってから「足腰を鍛えるため」とか「やせたいから」といった健康維持を目的としているという理由が出てくる。答えを出すのに時間がかかる、つまり、毎日休まず山に登るという不自然なこの行為に対し、用意した答えを持ち合わせていない。登山者たちは、知らず知らずのうちに、自分で理由を確認しないまま早朝登山を続けている面がある。さらに、他の登山者から理由を聞かれる機会がないことは確に言えることである。

登山者たちにとって理由はないのだ。そして、これが矢筈山に人が集まる最大の要因ではないか。はっきりとした理由が必要とされないから誰でも来られる。そして、他者と気軽に接することができ、果たすべき役割もないが毎日きても不自然ではなく、日常のような人間関係のしがらみもない。

「1回登ったら、また登りとうなる」と、毎日来る理由を答える人がいた。その、なんとなく来られる環境がここには整っているのである。

註 1 現在、山に登る行為を表す言葉には、「登山」、「山登り」、「山歩き」、「山行」などといったものがあるが、ここでは、岩壁の登攀や冬季の登山を含まないものとして「山登り」という言葉を用いている。

註 2 ジョージ・マロリーが言った「Because, it is there.」という言葉がどういった意味を持つかということには様々な説がある。また、実際にマロリーがこの言葉を言ったかどうかははっきりしていない。

註 3 「歩こう会」は門司の中高年を中心とした組織であり、月 1 回の活動を基本としている。活動内容は主に観光地の散策や、日帰り登山である。

参考文献・引用文献一覧

- 小泉武栄 「登山の誕生」 中央公論社 2001
- 藤田健次郎 「中高年、山と出会う」 山と溪谷社 1997
- 菊地俊朗 「山の社会学」 文藝春秋 2001
- 鷲 晴夫 「なぜ山に登るのか」 文芸社 1999
- 安川茂雄 「われわれはなぜ山が好きか」 小学館 2000
- 堤甚五郎 「矢筈の子」 1979
- 藤野 豊 「強制された健康」 吉川弘文館 2000
- 飯島裕一 「健康ブームを問う」 岩波書店 2001

表 1



